

〔思い出〕

神頭先生との思い出

長 橋 透

独特の雰囲気と誰にも心優しく接する神頭先生のご退職にあたり、特に日本観光学会における出会から今に至るおよそ30年間のエピソードを思い起こしながら、長年の感謝の気持ちを込めて拙文を寄せたいと存じます。

神頭先生のお名前を聞いたのは、私が初めて教員の職についた宮崎市内の新設大学で出会った塩田正志先生（日本観光学会理事）からでした。塩田先生は観光経済学を創始しようと尽力されたお一人でもあったので、その塩田先生の言葉のなかに出てきた、そして海外の専門雑誌への掲載経験をもつ神頭先生は、新しい研究テーマを探していた私にはある種憧れの存在に映りました。これは、1990年代前半の頃の話です。

その後神頭先生の業績を調べていくなかで、日本観光学会会長もされた西岡久雄先生編著の『観光と地域開発』（1996）の「第3章：観光立地と空間行動」に出会いました。経済立地論には浅学な私ですが、観光に対するミクロ経済学の応用を知る貴重な機会になりました。またこの西岡先生は私が大学院時代を過ごした青山学院大学教授であったため、もしかしたら同じキャンパスで神頭先生とすれ違っていたのかもしれませんが。不思議な縁を感じます。

神頭先生の諸論文に刺激を受け、1998年から私も日本観光学会で報告するようになると神頭先生からコメントを頂く機会も増え、あの笑顔でお褒めの言葉を頂いた時にはうれしい気持ちになりました。さらに翌年私が浜松市内の大

学に移ったことにより、日本観光学会中部支部のメンバーとして、愛知大学他での全国大会や支部会、そして愛大ワークショップや経営総合科学研究所のまちづくりプロジェクトでの視察会等でご一緒する機会が格段に増えました。また浜松にいらしたときには美味しい鰻をご相伴にあずかり、その鰻パワーのおかげなのか、共著論文を執筆することもできました。

2018年に、神頭先生は多くの会員に「説得」されて日本観光学会の会長になりました。5年の任期中は、特に若手研究者の発表機会を増やすことに注力されました。また新型コロナ禍にあっても学会活動をなんとか継続できたことや総合観光学会との合流を果たすことができたのも、神頭先生のお人柄を慕う皆が神頭先生を中心にして一つにまとまることができたからではないでしょうか。

日本観光学会以外では、神頭先生はゲームソフトのサッカーゲームが大変大好きです。かなりの腕前のように、よく「また夜更かししてしまったよ」と苦笑いしながら話してくれました。今はどこまでお上手になったのでしょうか。一度聞いてみたいものです。また神頭先生は、学会や研究会後に行う研究者仲間との懇親会もとても好きです。特にお酒が強いわけではないようですが、「こうして研究者仲間といろいろな話をしながら過ごすときのお酒が一番美味しい」と笑顔で話をしている姿を見ていると、一緒にいる私たちもとても楽しい気分になります。

ところで出会った当初、神頭先生あの独特の雰囲気とファッションセンス？から私よりもかなり年長の方かと思っていましたが、実は4歳しか離れていません。また神頭先生の学部は学習院大学で、私は武蔵大学です。いつぞやの会話の中で「四大ですね」と言って急に親しくなったことを覚えています。上記二大学に成蹊大学と成城大学を加えた旧制高校をルーツにもつこの四大学は「東京四大学」と呼ばれています。この四大学の出身者でなければ誰も知らない言葉ですが、出身者であると急に打ち解けてしまう「不思議な言葉」でもあります。このご縁もまた、神頭先生と長きにわたる関係が築けている理由なのかもしれません。

神頭先生との思い出

最後に、愛知大学を定年でご退職後もサッカーゲームの腕を上げたり、学会や研究会に顔を出したりと、元気な姿を我々に見せ続けてください。そして研究会後の懇親会を、今まで以上に楽しい場所にしていきましょう。これまでのご恩に深く感謝するとともに、これからもよろしく願いたします。

[思い出]

神頭先生と観光研究の思い出

角 本 伸 晃

神頭先生と初めて親しくお話をさせていただいたのは、中央大学経済研究所の研究会による2002年夏の地域調査のときでした。その頃、私は三重県の松阪大学（後に名称変更後に閉鎖）に勤務しており、その関係で三重県の地域経済について2泊3日の視察ルートをコーディネートしました。その際に、神頭先生は気さくにお声をかけていただき、立地論や観光研究のお話を熱心にされていきました。日本観光学会への入会も勧めていただいたので、その後すぐに入会しました。それまでは、三重県の地域経済の中で伊勢・志摩エリアの観光に言及する程度の関心しか観光には持っていませんでしたが、神頭先生との出会いによって、従来の研究分野である都市・地域経済学から観光経済学に大きく踏み出す契機となりました。

翌年3月に、私は椋山女学園大学に移ることになり、名古屋に引越しました。これによって地理的に近くなったことから、愛知大学経営総合科学研究所の研究会に参加するようになり、客員研究員として現在に至っています。神頭先生の研究アプローチは観光の諸事象について立地論を理論的フレームワークとして理論モデルの構築と実証分析を行うものですが、現実の観光地の状況と遊離したものではなく、必ず現地の調査を踏まえたものでした。その一端が経営総合科学研究所での夏の観光地調査でした。ほぼ毎年のように実施され、全国各地の観光地を訪れて地元自治体の観光課や観光協会、観光関連企業などでヒア

神頭先生と観光研究の思い出

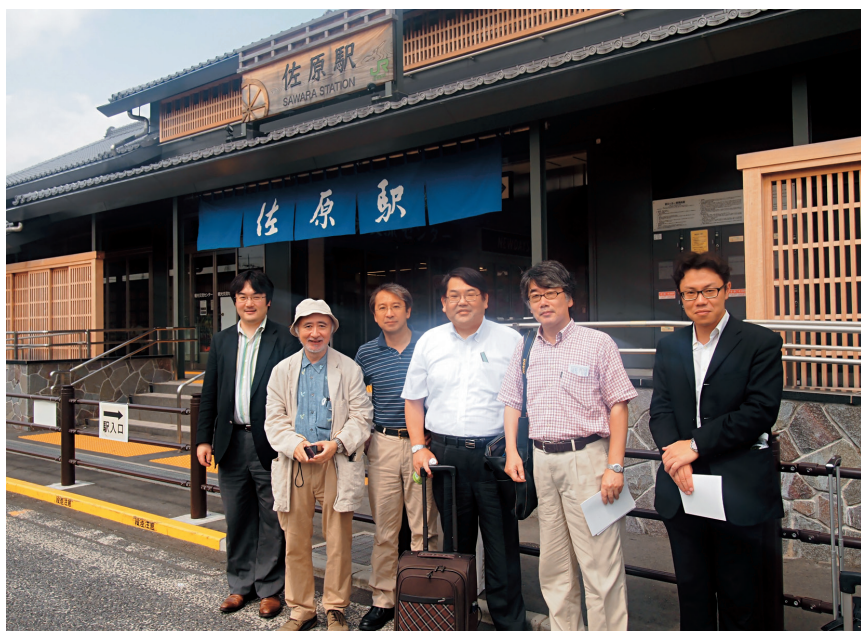
リングを行うとともに、観光資源を視察しました。真夏なので、参加したメンバーは汗だくになるのですが、神頭先生は軽快に調査の歩みを進められ、私は後をついて行くのがやっとでした。その後の楽しみが、調査先の観光地にある地ビールの美味しい店に入って水分補給をすることでした。その日の調査を振り返りながら、翌日のスケジュールを相談したことが懐かしく思い出されます。この観光地調査の成果は毎回きっちりと『叢書』にまとめられ、参加メンバーの業績になるような配慮もしていただきました。

社会人大学院では、神頭先生が指導教授をされた大学院生から何人も大学教員が輩出されました。その原動力は夜間の授業の後、近くの居酒屋で講義の続きが行われ、ざっくばらんな議論が楽しく交わされたことにあると思います。私も社会人大学院の非常勤講師で出講した後に合流させていただくことができましたが、神頭先生の教育への熱意に触発されました。

日本観光学会では全国大会に参加する側だけでなく、愛知大学で全国大会が開催された際には、神頭先生が実行委員長を務められ、私も実行委員としてお手伝いをさせていただきました。その後、椋山女学園大学でも全国大会を開催した際には、神頭先生に実行委員として支えていただきました。これらの準備の後には、慰労をかねて他の実行委員の方たちとともに美味しいお店に行きました。神頭先生は和食がお好きで、池下駅近くにあった奥志摩の「手こね寿司」がメの料理になることが多かったです。しかし、現在は閉店をしており、時の流れを感じるどころです（系列店の名駅笹島本店には同じメニューがあります）。

日本観光学会では中部支部長や編集委員長を経た後、2018年度～2022年度の5年間、会長を務められました。非常に残念なのはコロナ禍のため、会長職の後半では、神頭先生が思う存分に日本観光学会の発展のために活躍することができなかったのではないかと思います。しかしながら、コロナ禍下にあっても総合観光学会との合流を実現されたことは、神頭先生のご尽力の賜であり、会員の1人として記して感謝する次第です。

神頭先生は立地論の立場から観光研究を続けて来られていますが、もう1つのライフワークに数学の定理の証明があるそうです。退職後はこの定理の証明に勤まられるとのことなので、私もそれを見習って定年後にすることを探しておかねばと思っています。神頭先生、これからもますますお元気で、そしてときどき美味しい料理を食べながら研究談義におつき合ください。



2012年9月9日 千葉県香取市 JR 佐原駅前にて

[思い出]

神頭先生と「観光研究」

藤 井 孝 宗

私が神頭先生と最初にお会いしたのは2002年に私が愛知大学経営学部に着任を得たときであり、それから20年以上公私にわたるお付き合いをさせていただき、ご指導いただいている。私の専門は国際経済学であり、経済理論と統計学（計量経済学）をベースとした研究をしているため、当初は経営学部の他の同僚との研究手法、環境の違いに戸惑っていたため、同じ経済学を研究のベースとされている神頭先生のご助言は大変ありがたかった。

神頭先生から受けた学恩は様々あるが、特に大きなものは「観光」に関する研究を教えていただいたことである。今でこそ地域経済社会における観光の重要性は当然のこととして認識されているが、当時は2003年からはじまった「ビジット・ジャパン」キャンペーンよりも前であり、観光の重要を認識している研究者、特に経済学者はあまり多くなく、学会に参加しても研究者以外にも業界の実務家の参加者が多く、事例紹介の報告などが多かったことなどを考えると、先生の先見の明にはあらためて驚かされる。私自身も、神頭先生から研究と学会を紹介された当初は、そもそも「観光」というものの定義がよくわからなかったこと（実際、「観光とはなにか」を定義するのは現在でも自分にとっては難しいままである）、統計データも未整備であることなどから、観光は経済学的な分析にはなじまないのではないかと、思っており、あまり積極的に研究に取り組もうとは考えていなかった。ただ、国際観光にともなう人の移動は

国際経済学的に解釈すれば「国際間の人の移動」であり、国際経済学の重要な課題のひとつである「国際間要素移動」の種類のひとつであること、個人的に当時現実の貿易では重要な（同時に理論モデルにおいては通常無視される）国際運輸・物流サービスが貿易フローに与える影響に興味を持っていたことなどから、専門分野にまったく関係ないこともないであろう、といういささか軽い気持ちで研究を始めた感じであった。

私のこのような研究スタンスを知ってか知らずか、神頭先生には様々な当該分野の研究者をご紹介いただき、研究文脈などを教えていただくとともにことあるごとに観光研究のフィールドワークに誘っていただいた。私が地域経済社会における「観光」の重要性をある程度きちんと認識できたのはこれらのフィールドワークに参加し、実際の地域の状況を知ることが出来たからにほかならない。愛知大学経営総合科学研究所の研究プロジェクトその他で本当に様々なところに連れて行っていただき、研究調査をご一緒させていただいた。それらのひとつひとつが私にとって重要な経験となっており、現在にいたるまでの研究に役立っている。とくに私にとってはこの分野の研究を始めて間もないころのフィールドワークである小布施町での研究調査では多くの発見があり、大変有益であった。小布施町の現地調査では観光客誘致と「まちづくり」の関係性とその重要性を学んだが、とくに「まちづくり」という考え方は経済理論的な発想ではなかなか認識しづらいものであり、それまであまり重要視していなかったため、個人的に目を開かせられる経験であった。まちづくりには特定の熱意ある「個人」の貢献が非常に重要である、というその際に得られた知見は、経営学などではそれほど珍しい考え方ではないのかもしれないが、経済学の発想にはあまりないものであり、衝撃を受けるとともに、「観光研究」や「まちづくり」の難しさを改めて認識させられる経験であった。経済学はその性格上あくまで経済全体での効率性や経済厚生を重視するため、個々の個人の役割や貢献を無視しているわけではないもののモデル分析にのせづらいい傾向がある（その反省から生まれたのが行動経済学の考え方であろう）。そのため、観光やま

神頭先生と「観光研究」

ちづくりのために活躍できる熱意ある個人をどのように生み出すのか、など個人を育てる研究は得意ではない。神頭先生も経済理論的分析を研究手法の基盤としておられるはずにもかかわらず、このような視点も持ちつつ地域研究や観光研究に邁進され、日本観光学会という歴史ある観光学研究の拠点となる学会の会長まで務められたということに対しては尊敬の念を抱くほかない。

そのような経験を経て、いつのまにか私自身も観光やまちおこしに関する研究が自身の研究テーマのひとつとなっており、あらためて神頭先生から受けた学恩は計り知れない。残念ながら研究成果としてはその学恩を十分に返せているとはとても言いがたい状況であるので、今後も引き続きご指導いただき、なんとか研究を続けていければと考えている。あらためて、神頭先生の長きにわたる実りあるご研究に敬意を表するとともに、学恩に対する感謝を申し上げます。

〔思い出〕

神頭先生と私 — 研究、学会、若手育成 —

有 賀 敏 典

神頭先生、この度は愛知大学ご退職をお迎えになられるとのことで、誠にありがとうございます。僭越ながら、記事を書く機会をいただきましたので、神頭先生との思い出話をさせていただきたいと存じます。

私が初めて神頭先生にお会いしたのは、2007年に東京大学で行われた日本観光学会全国大会でした。当時私は博士課程在学中で、修士論文の成果を発表しに来ていましたが、初めて参加した学会であったためとても緊張していました。大学そばで行われた懇親会の時に、神頭先生に初対面ながら気さくに話しかけていただき、緊張がほぐれたことはもとより、研究の話、大学の話、進路の話などの様々な相談にのっていただきとても嬉しかったことを今でも鮮明に覚えています。その後は日本観光学会の大会等でご一緒させていただいたのはもちろん、神頭先生が主催された愛知大学ワークショップに機会があるごとに招待していただきました。このような場での発表機会をいただき、研究の議論を深められたことはもちろん、研究者の人脈形成の機会をいただけたことを本当に感謝しております。神頭先生のおかげで築けた人脈は、現在でも私の研究を行う上で重要な役割を担っており、研究を続ける上での良いモチベーションにもなっています。

研究内容としては、神頭先生が都市における立地や空間経済分析を専門にさ

れており、私の専門の都市交通計画と親和性が高く、いつも神頭先生の研究結果を興味深く拝見しておりました。バックグラウンドは経済・経営と工学で違っても、対象としている都市や交通については共通であるため、自分と異なるアプローチを勉強させていただくとても良い機会をいただきました。特に、駅のランクサイズモデルや商業施設の立地分析は、複雑な現実の事象について、シンプルなモデルでかなりの部分が説明できることを示すものであり、私の専門の都市交通計画分野においてもとても有用な知見でした。こうした神頭先生の素晴らしい研究成果と身近に接することができ、私の研究の視野は広がったと思っております。今後もこのような経験を踏まえて、微力ながら研究に精進していきたいと考えております。また、神頭先生の著書である『宇宙物理学の都市空間への応用』と『岐阜県高山のまちづくり』は、僭越ながら書評を書く機会をいただきました。書評としては至らなかった点多々あったかと思いますが、私自身はとてもよい勉強をさせていただき、もし少しでも読者の方々への参考になっていればこの上ない喜びです。

研究内容以外でも私が神頭先生から学ばせていただいたことは多々ありまして、そのひとつに学会活動の活性化があります。神頭先生は日本観光学会の会長を務められましたが、私は神頭先生が会長の期間に学会の活性化が加速したと感じております。私自身は一会員として学会に所属していたにすぎないため、残念ながら神頭先生が行っていた活動をすべて把握できているわけではありません。しかし、神頭先生が楽しそうに研究発表をされたり、活発な議論を促す質問をされたり、若手研究者に積極的な声掛けをして温かく迎えようとするお姿によって、若手を中心とした発表が増え、学会が確実に活性化してきたというのが私の実感です。この神頭先生の創り出した場が現在でも引き継がれているように思います。このような場で行われる研究のバックグラウンドや世代を超えた研究者の交流こそが、新しい発想の研究やイノベーションを生み出すきっかけになると私は確信しております。自分の研究のみならず、組織として、学問分野としての活性化を目の当たりにして、私もぜひ神頭先生のように

なりたいと思った次第です。

神頭先生には公私ともに大変お世話になりました。私がかねてから希望していた大学教員という職業につけたのも神頭先生の存在が大きかったです。愛知大学をご退職された後も、研究、教育、組織運営など様々な観点から、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。最後になりましたが、愛知大学経営総合科学研究所の皆様には、このような貴重な機会をいただき心より御礼申し上げます。

〔思い出〕

神頭広好先生との出会い

野 呂 純 一

神頭先生に初めてお目にかかったのは、2007年12月8日（土）、9日（日）の2日間にわたり、鳥取県民文化会館において開催された「応用地域学会（ARSC）第21回研究発表大会」の時でした。

当時、大学院博士後期課程の二年生であった私は、指導教授である故川嶋辰彦学習院大学名誉教授との共同研究を発表するため、この研究発表大会に参加していました。

8日午前中に私たちの発表を終え、午後になると川嶋先生は「僕はちょっと見たい発表があるので…」と仰ってどこかに行かれました。

夕方から懇親会があり、そこで川嶋先生とお話されている先生との会話の内容から、先ほど川嶋先生は、この先生の発表を見に行かれていたのだということがわかりました。

私も会話に参加させていただく中で、その先生は、川嶋先生が学習院大学に着任されて、最初に指導された博士前期課程の大学院生であったということや、現在は愛知大学の教授をされている、などご紹介を受けました。

この鳥取で初めて神頭先生にお目にかかってからは、先生が関東にいらっしゃる際に、たびたび食事に誘ってくださったり、ご著書をお送りくださったりするようになりました。

その後、神頭先生のご紹介により日本観光学会に入会できたことで、研究発

表や学会誌に論文を投稿する機会に恵まれ、神頭先生が所長を務める愛知大学経営総合科学研究所にも客員研究員として迎えていただきました。

愛知大学経営総合科学研究所の客員研究員となったことで、「2012年度愛知大学経営総合科学研究所『観光とまちづくり』プロジェクト」として、千葉県香取市における視察にご一緒させていただき、「水辺のまちづくり」について検討し、『日本における水辺のまちづくり－蟹江町、柳川市、香取市を対象にして－』愛知大学経営総合科学研究所叢書42」に著者の一人として加えていただきました。

2013年4月からは愛知大学経営学部の「公共経営論」を2021年3月まで担当させていただき、毎年、夏休みに集中講義で愛知大学に伺う際には、神頭先生の研究室にお邪魔しました。

私にとって、この「公共経営論」は、大学教員として初めて担当する講義であったことから、大いに緊張し、自信もなく、わからないことだらけでした。そんな時、神頭先生は、笑顔でこれまでのご自分のご経験についてお話しください、励ましてくださいました。中でも特に、「心配しないで自信を持って好きにやればいい」というお言葉に救われ、この愛知大学での講義経験が、現在でも大学で講義する際の私の原点となっています。

2018年11月に南山大学名古屋キャンパスで行われた「第112回日本観光学会全国大会」では、神頭先生との初めての共同研究である、「大都市における観光の外部性に関する研究」を発表し、それは、「大都市における観光の外部性－観光における都市の成長モデルの構築と実証分析－」というタイトルで、この『経営総合科学』の第113号に掲載されています。

このように神頭先生には、現在では度々お目にかかる機会があり、いつもご指導をいただいておりますが、神頭先生のご紹介で入会した日本観光学会の全国大会及び、それに関連する研究会を除き、他の学会もしくは研究会では、その後、神頭先生とお目にかかる機会は一度もありません。もし、鳥取における研究発表大会に参加することがなければ、神頭先生お目にかかることはなく、

神頭広好先生との出会い

また、神頭先生が愛知大学にお勤めされていなかったら、私が「公共経営論」を担当させていただくこともなかったでしょう。

この奇跡的で私にとって幸運な素晴らしいご縁と、これまで長きにわたりご指導をいただいている神頭先生には深く感謝申し上げる次第です。

来学年度からは、神頭先生の研究室にお伺いすることができなくなり、少し寂しい気が致しますが、これからも、引き続き学会や研究会などをはじめ、様々なところでお世話になるかと存じます。

今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

長きにわたる愛知大学経営学部でのご勤務、本当におつかれさまでした。

[思い出]

神頭広好教授への感謝

猿 爪 雅 治

I はじめに

神頭広好教授の退職にあたり大学院在席から今日まで、ご指導いただきましたことに感謝する気持ちで、私のこれまでの研究成果をまとめてみたい。

私は、55歳で銀行を定年退職後に出身大学の愛知大学大学院修士課程に入学しました。修士課程では、都市銀行における人事制度の変更と女性労働者の処遇をテーマに研究をしました。博士後期課程に進学後も修士課程でのテーマを更に研究する方向で考えていましたが、神頭教授から指導を受けることになってからは、男女の雇用に重力モデルを応用した研究をすることになりました。労務管理に空間の相互作用を扱う視点を私自身全く持ち合わせていなかったことから、当初は、重力モデルに関する基礎から勉強することになりました。神頭教授に随分余分な時間をお掛けすることになりました。しかし、神頭教授の丁寧なご指導と研究に対する熱意により、以下にまとめる研究成果に結びつけることができました。

II 研究成果

最初の研究成果は、2013年6月に名古屋地理学会で「女性の働きやすさに

関する研究」を発表した。女性労働力率に着目し、それに影響する要因として7項目の変数をもとに回帰分析・主成分分析を行い、全国的な雇用特性を明らかにしようとした。これを基に2013年10月経営総合科学第100号に「女性の働きやすさに関する研究 福井県を中心として」をまとめた。

2015年9月には男女の雇用差を表す8項目の変数と観光データを使用し、主成分分析に応用することによって、男女間の雇用の差による観光動向の特徴をまとめた¹。この論文以降、男女の雇用差に生産関数モデルを応用した研究が中心となり、博士論文の基礎にすることができました。

2015年2月の日本観光学会中部支部共催愛知大学ワークショップにて「男女雇用差に見る地域生産水準への影響」を発表、2015年10月に岡山大学にて開催された日本地域学会年次大会にて「日本における男女雇用差にもとづく生産水準に関する研究」²を発表し、優秀発表賞をいただくことができた。これは神頭教授のご指導なくしては成し得なかったことと感謝しています。この受賞でパワーをもらい博士論文「わが国の男女雇用にもとづく地域生産に関する研究」に結びつけることができた。

2016年以降、男女雇用について生産関数モデル、空間モデル、重力モデルを応用した論文を発表したことは、先行研究にない新しい視点での研究であったと思っています³。その後は、日本観光学会において私自身の地元岐阜東濃圏域の観光経済効果やリニア中央新幹線開通による観光経済効果を距離弾力性モデルによる推計を発表した。男女雇用のテーマから観光領域に研究の幅を広げられたことも神頭教授のご指導のお蔭と感謝しています。

ここ数年は、コロナ禍状況を言い訳に研究が疎かになったことは大いに反省しています。また、リニア中央新幹線の開通が予定より遅延していることで、リニア中央新幹線開通による経済効果の検証ができないことがとても残念に思っています。

このように労務管理に空間の相互作用を扱う視点で研究成果をあげることができたことはとても有意義であったと思います。

以上、神頭教授の指導による私の研究成果を要約してまとめました。

Ⅲ おわりに

愛知大学大学院博士後期課程在籍 2012 年から今日まで長い期間ご指導いただきました。所属学会での論文発表、学会での他大学の先生方との交流など神頭教授を通して実現できたこと、研究への熱意、面白さをご教授いただきましたこと、神頭教授とのご縁をいただきましたこと心から感謝申し上げます。

注

- 1 経営総合科学第 104 号 2015.9「男女間の雇用の差による観光動向の特徴」。2014 年 11 月秀明大学で開催された日本観光学会全国大会において発表。
- 2 岡山大学で開催された日本地域学会年次大会で優秀発表賞を受賞し、2016 年 2 月経営総合科学第 105 号神頭教授と共著でまとめた。
- 3 経営総合科学第 105 号 2016.2「わが国の男女雇用にもとづく地域生産に関する研究」、経営総合科学第 106 号 2016.11「土岐アウトレットモールの雇用圏と地元の顧客リピート圏」、経営総合科学第 111 号 2019.9「労働の規模と空間距離」を神頭教授との共著。

〔思い出〕

神頭広好先生のご退職に寄せて

加藤好雄

神頭広好先生のご退職にあたり、在職期間中に大変お世話になった一人である小職から先生のご功績について御礼の言葉を添えさせていただければと存じます。

神頭先生は長野県のご出身であり、その後、愛知大学の専任講師として経営立地論や都市経済地理学を専攻として大学教員のキャリアをスタートし、研究及び教育にご尽力されてこられました。神頭先生の代表的な書籍は、『都市の空間経済立地論－立地モデルの理論と応用－』です。この書籍は小職が大学院生の際には、講義や演習の参考テキストとしてご指導いただきました。そして、研究では観光や交通に関するテーマでご業績を重ねておられ、膨大な数の論文をご執筆し数々のご功績を残されました。また、愛知大学経営総合科学研究所の所長としてご自身の研究だけでなく、様々な研究者の方を結びつけることで経営分野の研究を深化させ、愛知大学における研究活動の発展に大きく寄与していたものと拝察いたします。

神頭先生は、このような研究者としての多大なご功績のみならず、愛知大学における教育者としても大変なご尽力をされておりました。神頭先生の教育者としての特に目覚ましいご功績は、愛知大学大学院の修士課程の修了者だけでなく、博士後期課程の学位取得者を3名も輩出したこととございます。その3名のうちの1人である小職は、修士課程から博士号の学位取得までは指導教授と

して、そして大学の教員となってから現在までは、研究者と教育者の大先輩としてご指導いただきました。特に大学院生の時期には、ご担当の講義が無い週末にまで、大学の研究室で論文執筆や学会報告のきめ細やかなご指導を賜りました。ご指導の中で得られた最も重要なことは、研究は「面白い」という思いです。これは大学教員が仕事になってからは特に感じられることで、この思いを自覚させてくれた先生のご指導には深く感謝申し上げます。

愛知大学の専任教授の職はご退任されることとなりますが、神頭先生には、引き続き、後進のご指導と研究教育へのご協力をお願い申し上げます。小職の母校である愛知大学の発展に長年にわたりご尽力を賜りまして、誠にありがとうございました。